「白い点」

ひたすら天頂を目指す、二匹の蝶を見たことはありますか？
彼らに出会ったら、ぜひ、祝福してあげてくださいね――

予備校からの帰り道だった。冬の訪れもまだ遠いと思わせる、穏やかに晴れた昼下がりだった。堤防道に自転車を転がしながら、今日の授業なんてすっかり忘れていた。

堤防道は緑が多い。僕はこの道が好きだった。朝はいつも寝坊気味、信号が無いのをいいことに、息が青臭くなるまでペダルを猛回転させて通り過ぎるのだけれど、帰りはハンドルに両腕を寝そべらせ、車の通らないこのお気楽な道を、心ゆくまでゆっくりと愉しむのが日課だった。

道の左手にあるのは、決して大きな川ではない。ドブ川と呼んでも差し支えないような川だ。それでも異臭がするほど汚れてはいないし、川辺には鳥達がよく戯れていた。この秋の日には、堤防わきに菜の花が咲き、モンシロチョウがたくさん飛び交っていた。

ポタリング以下の速度でよたよたと進む僕の周り、もし手を伸ばせばすぐ届くだろうところにも、二匹のモンシロチョウが仲良く飛んでいる。ラブラブだなあ、この二匹。右に、そして左に。ひらひらひらひらと舞い続ける。彼らのデートコースは、僕の帰り道と同じのようだ。ふふ、ちょっとしたランデブー。

だんだん二匹の飛ぶところが高くなってくる。へえー、けっこう高いところで愛し合うんだね、君たち。相変わらず二匹のモンシロチョウは、僕の上を飛んでいた。僕は彼らに先導されるように、ゆっくりと自転車を進めていく。

あれ？　ちょっと高すぎないか？　もう二匹は、先ほど通り過ぎたヒマラヤスギよりも高いところを飛んでいる。小さな橋のたもとで、とうとう僕は自転車を止めた。澄み切った青空の中、無邪気に舞い遊ぶ二匹の白い点。いったいどこまで飛ぶつもりなんだ？

僕は眼鏡を取り出した。裸眼で見えにくくなってきたのだ。その眼鏡をかけてさえ、二匹は今や真っ青な空にかすかに動く、一つの白い点になっている。ハンドルを持ったまま空を見上げる姿勢が少し苦しくなってきた。彼らを見失わないよう気づかいながら、自転車のスタンドを立てる、が。

見えなくなった。いや、見えた。いや、もう――一つの白い点は、僕の首を垂直に反り返らせたまま、ついに僕の視力が及ばないほどの高みに達してしまった。

――嘘だろ？

僕はもはや彼らの消えた、ただの青空を見ていた。ずっと見ていた。顎のわきが痛くなるほど、ずっとずっと、青空のてっぺんを見ていた。

数分後。
僕ははるか右手の空に彼らを発見した。
一つ、いや二つ。白い小さな点が、ゆっくりと上空から舞い降りている。それぞれが正三角形の斜辺を描くように、降りるにつれて二人は離れ離れになってゆく。全ての力を使いきり、まるで小さな紙切れのように、二つの小さな点が、はらはらと彼方の地上に堕ちていった。

あの二人――もう二度と、この世で会うことはないんだ――

とぼとぼと僕は家に帰りついた。自転車を押して、歩いて帰ったと思う。

裏木戸を開けると、庭にいた母がおずおずと告げた。小学二年生の夏休みが始まった日に、我が家に迷い込んできた子犬――クロが死んだ、と。年老いた彼女は、舌をかわいく出して、死んでいた。

白い点

【付記】
昆虫学者に聞いたことも無いので、このようなモンシロチョウの交尾というのが当たり前なのか、それとも稀な行動なのかは、分からない。モンシロチョウの大群がヒマラヤ山脈を越える話は聞いたことがあるし、それほど珍しいことではないのかもしれない。しかし、当時十八歳だった僕がたまたま見たこの光景には、生命や死、そして性行為に対する考え方に、ずいぶん影響を与えられた。
クロの死と同日だったのは、さすがに予兆めいたものを感じずにはいられない。そのあまりの美しさ、はかなさ、白さは、「死」と完全に符合している。
また、僕はこれ以上純粋で完璧な性表現に出会ったことはない。この文章でも余すところ無く描写できたとは思ってもいないし、他の音楽・絵画などの表現手段をしても、十分に表現しうる自信は無い。実際の性愛においても、これほどの愛を二人で叶えられるかどうか、分からない。僕にも相手にも、背中に羽は生えてないんだろうし。
でも――人間には想像力の翼がある。たとえかび臭いふとんの中でも、二人で青空の彼方まで飛んでいくことは、できる。大事なのは、二人で飛んでゆくことなんだろう。そんな風に思っている。

一つの白い点に、なる。
いつか、離れ離れになる時が来ても。

「四ら蛭」

Jul. 24, 2003
A.Matsu!
Suita City

Winged-White:
http://www.ne.jp/asahi/winged-w/fly/